

Ichthyological Research 72 巻 3 号掲載論文
和文要旨

**日本産カワヤツメ属の再検討と 2 新種 *Lethenteron satoi* ウチワスナヤツメ(新称)および
Lethenteron hattai ミナミスナヤツメ(新称)の記載ならびに *Lethenteron mitsukurii* キタスナヤツ
メ(新称)の再記載**

酒井治己・岩田明久・渡辺勝敏・後藤 晃

モノグラフ 72(3): 289–319

日本産ヤツメウナギ科カワヤツメ属を形態学的・遺伝学的に再検討した結果, *Lethenteron satoi* sp. nov. ウチワスナヤツメ(新称), *Lethenteron hattai* sp. nov. ミナミスナヤツメ(新称) (従来の *Lethenteron* sp. S), *Lethenteron mitsukurii* (Hatta, 1901) キタスナヤツメ(新称) (従来の *Lethenteron* sp. N), *Lethenteron reissneri* (Dybowski, 1869) シベリアヤツメ[従来, しばしば *Lethenteron kessleri* (Anikin, 1905)と混同], *Lethenteron camtschaticum* (Tilesius, 1811) カワヤツメの 2 新種を含む 5 種の存在が明らかになった. ウチワスナヤツメは現在北海道からのみ得られており, 生時の体は黄褐色で咽喉部および尾鰭と第 2 背鰭の先端は暗色であることはなく, 尾鰭は丸く, 各鰓孔間の下側に感丘群はなく, transverse lingual lamina(前舌歯板)は三角形で中央歯を欠き, supraoral lamina(上口歯板)と infraoral lamina(下口歯板)には丸い突起様の歯があり, 躯幹部筋節数(TM) 55–61, 第 1 背鰭基筋節数(FDFM) 12–15, 第 2 背鰭基底筋節数(SDFM) 33–35, 第 1 背鰭基底後端—肛門間筋節数(FDFCM) 8–13 であることの組み合わせで同属他種と識別される. ミナミスナヤツメは本州, 四国, 九州, 朝鮮半島南部に分布し, 生時の体は黄褐色で咽喉部および尾鰭と第 2 背鰭の先端は暗色であることはなく, 尾鰭はひし形またはスペード型, 各鰓孔間の下側に感丘群があり, 前舌歯板には 1–5 本の中央歯があり, 上口歯板と下口歯板には鈍い三角形の歯があり, TM 53–60, FDFM 15–19, SDFM 34–39, FDFCM 4–9 であることの組み合わせで識別される. キタスナヤツメは北海道から本州に分布し, 生時の体は黄褐色で咽喉部および尾鰭と第 2 背鰭の先端は暗色であることはなく, 尾鰭はひし形またはスペード型, 各鰓孔間の下側に感丘群はなく, 前舌歯板には 1 本の中央歯があり, 上口歯板には鈍い三角形の歯, 下口歯板には丸い丘状の歯があり, TM 59–65, FDFM 15–25, SDFM 34–39, FDFCM 8–13 であることの組み合わせで識別される. 日本産カワヤツメ属の形態学的検索表を提示した.

(酒井: 〒759–6595 山口県下関市永田本町 2–7–1 水産大学校生物生産学科; 岩田: 〒606–8304 京都府京都市左京区吉田下阿達町 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科; 渡辺: 〒606–8502 京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻; 後藤: 〒040–8567 北海道函館市八幡町 1–2 北海道教育大学国際地域学科)

アラビア海からの 1 新種の記載をともなうハチ属(オニオコゼ科ハチ亜科)の分類学的再検討および *Apistus balnearum* Ogilby, 1910 の分類学的地位:*Apistops caloundra* (De Vis, 1886) の新参異名

松沼瑞樹・Ying Giat Seah・本村浩之

モノグラフ 72(3): 320–349

オニオコゼ科ハチ亜科のハチ属 *Apistus* は従来, *Apistus carinatus* (Bloch and Schneider, 1801) のみを含む単型属とされていたが, 分類学的再検討の結果, タイプ種に加えてアラビア海から得られた 1 新種 *Apistus shaula* を含む 2 有効種を認めた. 既知の見解の通り, 次の 7 名義種は *A. carinatus* の新参異名と判断した: *Apistus alatus* Cuvier, 1829, *Apistus israelitarum* Cuvier, 1829, *Parapistus marmoratus* Steindachner, 1866, *Apistus evolans* Jordan and Starks, 1904, *Apistus venenans* Jordan and Starks, 1904, *Apistus faurei* Gilchrist and Thompson, 1908 および *Apistus macrolepidotus* Ogilby, 1910. *Apistus shaula* は *A. carinatus* と比較して, 胸鰭の内側に多数の黒色点をもつこと(後者には無い), 第 1–5 背鰭棘が比較的長いことにより識別される. これまで *Apistus balnearum* Ogilby, 1910 は *A. carinatus* の新参異名とみなされていたが, 本名義種のシタイプ 2 標本(幼魚)は下顎に 5 本のヒゲをもつことからハチ亜科の *Apistops caloundra* (De Vis, 1886) に同定された.

(松沼: 〒606–8317 京都市吉田本町 京都大学総合博物館; Seah: Faculty of Fisheries and Food Science, Universiti Malaysia Terengganu, 21030 Kuala Nerus, Terengganu, Malaysia; 本村: 〒890–0065 鹿児島市郡元 1–21–30 鹿児島大学総合研究博物館)

日本産淡水ハゼ科魚類カワヨシノボリ(*Rhinogobius flumineus*) 仔稚魚の飼育下での初期形態発育

森岡伸介・長田賢人・廣中 航・齊藤冠太

本論文 72(3): 350–357

人工飼育下でのカワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* 仔稚魚の成長に伴う形態発育を記載した. 飼育下での体長は孵化直後に 5.7 ± 0.1 (平均 $\pm$ 標準偏差) mm, 孵化後 11 日目に 8.9 ± 0.1 mm, 24 日目に 11.9 ± 0.1 mm, 42 日目に 14.7 ± 0.4 mm に達した. 脊索後端の屈曲は孵化前より認められ, 孵化後 1 日目(体長約 6.4 mm)には屈曲が完了するとともに, 卵黄は 9 日目までに完全に吸収された. 体形は稚魚期に入り安定する傾向にあった. 第 2 背鰭および尾鰭には孵化直後から軟条が出現しているものの他の鰭に鰭条は認められないが, その後急速に鰭条は発達し, 体長 6.8–6.9 mm(孵化後 9 日目)までに全鰭の鰭条は定数に達した. 孵化直後から 3 日目にかけて黒

色素胞はほぼ観察されなかったが、体長 9 mm(孵化後 11 日目)には全身が黒色素胞で覆われた。両側回遊型／湖沼型の同属他種と比較して、河川型である本種の極めて急速な仔稚魚期の形態発育は、河川における生残・成長のための進化的な適応によるものと考えられた。

(森岡・長田・廣中・齋藤: 〒444-3505 愛知県岡崎市本宿町上三本松 6-2 人間環境大学環境科学部)

ラオスから得られた好流性ナマズ目魚類(Sisoridae 科)の 1 新種 *Oreoglanis brevicula*

Heok Hee Ng・Maurice Kottelat

本論文 72(3): 358-364

ラオス北部から得られた 1 標本をもとにナマズ目 Sisoridae 科の 1 新種, *Oreoglanis brevicula* を記載した。本種は下唇後縁に明瞭な中央の欠刻がないことで *Oreoglanis delacouri* 種群に属し、以下の形質の組み合わせによって同属他種と識別出来る: ヒゲの長さは頭長の 31%, 胸鰭は腹鰭基部に達しない, 肛門における体高は体長の 10%, 脂鰭の基底長は体長の 36%, および後部は尾鰭背部の前起鰭条から離れている, 尾柄長は体長の 19%, 尾柄高は体長の 4%(長さの 4.3 倍が尾柄長と同じ), 尾鰭は三日月状, および脊椎骨は 42 個。

(Ng: Lee Kong Chian Natural History Museum, National University of Singapore, 2 Conservatory Drive, Singapore 117377; Kottelat: Rue des Rauragues 6, 2800 Delémont, Switzerland)